

The Fulbrighter
in
Chubu

No.20

July 2010

Chubu Fulbright Alumni Association

The Fulbrighter in Chubu No. 20

目 次

講演

アメリカの常識・日本の常識

愛知学院大学商学部名誉教授 今光 廣一 2

Developing Second-Generation Voices:

Women in the Pre-War Nisei Writers Group

カリフォルニア大学ロサンゼルス校 歴史学教授 Valerie J. Matsumoto 9

An Exhibition of Japanese American Women Through Social Networks

全米日系人歴史協会 事務局長 Rosalyn M. Tonai 23

(Executive Director of National Japanese American Historical Society)

隨想

13年ぶりの Washington D. C.

中日新聞経済部 越守 丈太郎 29

会員便り 32

会務報告 49

会則 51

役員名簿 54

会員名簿 55

アメリカの常識・日本の常識

～日米制度の比較を通して～

ガリオア・フルブライト中部同窓会講演 2009/05/30

愛知大学車道校舎

愛知学院大学名誉教授 今光廣一

1. はじめに

本日は、それぞれの分野でご造詣の深い皆様方のまえでお話させて頂くのに、少々問題ありのテーマをわざわざ選びましたのは、日頃これぞアメリカの常識と物知り顔で話していくても、当のアメリカから来た人に否定されたりすることがあつたり、日米の文化比較を自身ではしているつもりでも、必ずしも当を得ていないかもという危惧を、今日の機会を利用して少し賢くなりたいという下心からあえてこのテーマを取りあげさせて頂きました。

日本のある国語辞典では、「常識とは一般の社会人として、だれもが共通して持っている知識や分別」と説明されており、また「常識も場所や時間により変化する」とも述べられております。常識は国や地域が作っていった文化や制度の中で、人々が共有する規範や慣習ともいえます。「所変われば品変わる」ともいいますが、広辞苑では「土地がちがえば風俗習慣がちがう」という意味だと説明しています。

1953年秋のオハイオ州立大学入学式でデビドソン学長が「Human being is alike, but not alike」と話しました。人は表面が似ていても、それぞれ違うのだという前提で行動すべきだという意味の内容だったと思います。日本だったらさしづめ「世界人類皆兄弟」で alike がさらに強調されることでしょう。最近、会社の機密漏洩事件が頻発していますが、この場合は、日本の常識を180度転換する必要があります。社会を性善説と性悪説で割り切って日本文化の性善説志向を強調してもそれをグローバルに担保するだけの基盤が欠けています。

2. 日米教育界事情

日本では「世間並み」とか「世間が黙っていない」などという、良くも悪くも個人が、全体のなかでの役割が問われがちです。そのあたりを意識しながらアメリカと比較して見たいと思います。

最初の留学先はさきほどのオハイオ州立大学でしたが、ここではアメリカの教育制度とりわけ高校レベルの職業教育を中心に学びました。戦後アメリカからの教育使節団による日本の教育制度改革で6・3・3・4年制のワン・パターンな教育制度が出来あがり、今日まで続いているが、アメリカに来てそれはまだ試行中ともいえる制度であることを知りました。

本日のテーマとの関係で、日米の教員採用のプロセスが、表面的には似ていても、中身に大きな違いがあることをお話ししたいと存じます。コロンバス市の高校教員採用試験は、地区の教育委員会が担当するのは日本と同じですが、同じ時期に、同じ学校を卒業し、年齢も学歴も全く同じ

条件でも、応募者の要求を中心とした教育委員会の面接官とのやりとりの結果で給与がきめられているのを知り大変驚きました。同じ大学の卒業生が同じ高校に就職したら日本なら当然待遇は同じ筈ですが、アメリカでは違うのが当たり前です。

帰国してから2つの大学からお誘いを受けましたが、もう一方の大学が倍額の給与で、数年間はアメリカの関係大学で研究するという好条件でした。結果的には現在の愛知学院大学に最初に提示された給与の倍額で助手として採用されました。ところが後になり、これが既に任用されていた専任講師の先生方の倍額になることが明らかになり大騒ぎになりました。その後、大学の給与規定も改善されましたので、先生方は大学の近代化のおおいなる前進と理解されていました。

近代化については百家争鳴、皆様方にもいろいろなご意見がおありと存じますが、その concept making と control をおこなっているところは、昔も今も日本では国の中央官庁であることに変わりはありません。最近の一連の規制緩和と経済事情のなかで、わが文科省も手綱をゆるめていますので、私学では給与規定があつて無き状態のところも出てきています。やはり、どんな人々が地域や国で権力を行使しているのか、そしてその行動を制御する社会の文化的基盤がどんな状態であるかによっても違いますので、これで日本の学校の給与決定方式がアメリカに近づいたとはいえないでしょう。

また当時のオハイオ州コロンバス市の高校課程での職業教育は日本に比べ実務偏重で、小売商コース、秘書コースなどに分かれ、卒業後はどんなところで働くことになるのか、業界の賃金や給与のしくみなども教えていました。今でもそうですが、その頃の日本の高校商業課程では、卸とは何かとか小売業とは何かというような抽象的知識偏重型の教育が中心で、実務が単純なこともあり教員自身実務に無関心でした。百貨店でも高卒は事務方、売り場に立つ人は中学卒というのが社会的な認識だったように記憶しています。

大学の科目履修方法も日本と正反対といいましょうか皆様ご存じのように、学生が自由につくるアラカルト中心で、日本のように学部教授会が苦心して作りあげた定食コースでなく、オハイオ州立大学では航空学部、農学部お構いなしの履修科目のつまみ食いで、自家製のカリキュラムを作った後、コーディネータの先生による調整と承認を貰うだけでした。科目履修の選択制限が強い日本の大学と対照的です。

社会学者で経営評論家の P. F. Drucker 教授が2年ほど前に日本経済新聞に寄稿し「日本の大学制度はアメリカより100年遅れている」と述べて、知識偏重で実社会と遊離している日本の現状を批判しています。UCLAで開かれたある会議で実務偏重のアメリカの大学教育カリキュラムをどうするかというテーマがとりあげられたこともありましたが、その前に横たわる実社会の現実があります。

アメリカの大学では日本のように学生の就職活動を大がかりに支援せず、学生まかせが一般のようです。それは大学新卒者のみの労働市場が存在したり、とくに文系では新卒者に専門技能を期待しない日本と異なり、新卒者も中途採用者同様に能力を要求され、応募者が待遇交渉するのがアメリカです。私も実際に大学の商業学の授業の一環でコロンバス市内の代表的な百貨店で入社試験を受けました。百貨店の幹部を前にして、私は何ができるのか、それはこの百貨店に

どんな利益をもたらすのかを力説しなければなりません。相手はこれについて容赦なく疑問点を突いてきます。日本ならおきまりの志望動機や尊敬する人物とか質問が会社側からあってそれに応募者が答える形で入社試験は進行していきます。アメリカでは質問するのは応募者で、答えるのは会社側です。質問内容のレベルが低ければハイそれまでとなります。そしておしまいは、だからいくら欲しいという採用条件交渉に移ります。ここまでくると契約のレベルとなり入社後契約した能力が発揮出来なければすぐお払い箱となります。

1972年秋に2度目のフルブライト資金を得てコロンビア大学で研究する機会にめぐまれました。当時、私が所属していた経営大学院(graduate school of business)には助手、客員を含めて95名の教員がいて、大学全体の学生数は、学部生、約3000人、大学院生、12000人位でした。

コロンビア大学の特徴は大学院大学であることで、現在は学部生(undergraduate students)は約7000人で、大学院生(graduate students)は約16000人です。教員は全体で3543名です。ちなみに東京大学の学生数は学部と大学院が拮抗しており各14000人強となっています。名古屋大学では学部10000人、大学院6500人で大学院生は学生総数の40%弱です。しかし日本の私立大学では早稲田、慶應でも全学生対大学院生の比率はそれぞれ12%、15%です。その他、地方で全学部に修士、博士のコースを置いていても5%を切るところも見受けられます。

アメリカのもう一つの側面は意外な学歴社会であることです。アメリカの会社では職務給と能力給が併用されており、高校卒クラスの秘書の仕事に着いた人は一流大学を出ていても同一賃金で賃金格差は職種内でしか生じません。そして職種を代えない限りたいした昇級は望めません。

それには困難な資格取得に挑戦するか大学にもう一度入ってやはり何らかの資格、たとえばMBAなどをとる必要があります。MBAの資格を取得しても、2年で1人の人間がそんなに変わるわけがないのに、上級職に昇進できるのです。コロンビア大学ではそのために会社派遣の社員のための特別コースを設けていました。しかし派遣される社員が仕事にとらわれず勉強に集中出来るよう会社側に厳密な契約条項の遵守を要求しているところは日本と真逆です。日本はこのような社会環境でないのに、アメリカに倣って大学院に社会人MBAコースを設けるところが多いのですが学生はさっぱり来ません。ひとつには、アメリカの常識とまではいえませんが、日本の大学院の修士課程、博士課程の概念的な位置づけがおかしいと思います。アメリカでは修士課程は職業的専門家の養成と位置づけ、博士課程は教師または研究者の育成が目的としており、受験資格は同等で並列的に取り扱われています。当時のコロンビア大学の graduate school of business の入学案内にも、the Ph.D program の入学資格は、4年制大学卒業の学士号保持者であることが明記されています。ただ、修士号は必要ないが殆どの応募者は修士号保持者で高度の学力と微分・積分学の実力が要求されると追記しています。日本では修士課程を博士前期課程、博士課程を後期博士課程とも呼び、どちらもいわゆる学術研究の指導が中心で、修士課程では実務的な訓練を行わないばかりか、教授陣もその方面は手薄です。コロンビア大学の経営大学院では博士課程修了後直ちに優秀者を準教授として残しますが、だいたい2~3年で大企業の部長クラスに送り出し、数年で再び大学に呼び戻すような方法をとっていました。そしてそれとは別にそれぞれの専門コースには学術業績も豊かな業界出身の超ベテラン教授がいまし

た。オハイオ州立大学では教室と教授研究室が一体化されていてベルが鳴ると同時に教授が顔を出していたのが印象的でした。また助手が講義の準備をしたり宿題の配布、採点も助手の仕事のようでした。また同大学では昼夜同じ講義が行われていて学生は自分の都合にあわせて講義に出られるようになっていました。したがって、夜間部卒業生はいないわけです。しかしこのような方法が他の地域で実施されていたのかどうか、また今でも続いているのか分かりません。

3. 日米産業界事情

年功序列の色濃い日本企業の場合、文系の場合十把一絡げ的な入社試験で採否が決まり、あとはエスカレータですすい昇進し定年までの40年が保証されます。中小企業ではこうはいきませんが、しかし最近は大企業でもリストラや早期退職を迫られるケースが増えています。こうした第2次大戦中から戦後にかけて維持されてきた、個人よりも家族やコミュニティーの生存目的にした社会統制的賃金システムが現実には崩壊の方向にあります。それは今日その存続が問われている日本型年功序列賃金システムに他なりませんが、この制度の維持には日本でも賛否両論があります。会社は誰のものかについても、アメリカではオーナーである株主を中心に考え、日本ではそこで働く従業員に重心が置かれてきていたようです。

しかし、日米での最も大きな社会的慣習に見られる差違は、個人の責任と義務が、日常的な行動でも、仕事上においても意識され、常に確認を怠らず、のちのちの誤解や事故を未然に防いでいることです。いうなれば、日本では「Human being is alike」志向で、他人の中にもう1人の自分を求めがちです。アメリカでは結婚の時に、離婚する場合の条件まで取り決めておく人もいるそうですが、日本では、学校や会社に就職するときできえ、仕事内容について契約をとり交わしたり、お互いがこれに違反した際の扱いについて話し合うなどはまずしないのが慣例です。日本には「暗黙の了解」という社会関係が存在します。そこにはパワー関係が存在し、「暗黙の了解」は多くの場合、対等の関係でなく、立場の弱い者が強い者によって社会的に強制される種類のものです。1964年に日本から来た視察団の方々とフォード自動車のリバー・リュージュ工場を訪問したことがあります。ある方が下請(vendor or contractor)との価格交渉について質問しました。フォード側の「取引は対等で、フォードによって証明不可能な、コストその他の条件は要求出来ない」という説明を聞いたとき視察団の方々から「フオー」という溜息が聞こえました。そして独禁法の取り扱いについて日米におおきな差があることを感じました。

日本は歴史的にみてもヨーロッパのような市民革命を経験しておらず、社会的な近代化は未発達の状態にあります。会社の不正を告発したり、業界内の不正や下請企業が発注元企業の不正を告発した場合、告発した側が社会的制裁を受ける結果になることはよく知られています。しかし「暗黙の了解」志向は、これからさらにグローバルな展開が予想される日本の国際関係、企業や個人の行動において、国際社会では通用せず、改めるべき日本人の常識の1つでありましょう。

1964年は、日本のある機関から「アメリカにおける研究開発の調査・研究」をテーマとした研究委託を受けアメリカに滞在していました。先ほどのように日本からやってくる各種の産業視察団のコーディネータも引き受けましたが、アメリカの大手企業50社以上を、テーマを代えて2度、3度と

同じ会社を訪問しました。ある時は研究開発、別のグループでは工業所有権(特許)、そして人事労務管理とテーマを代え、あらゆる角度から特定部門の分析が可能になりました。日本からの視察団はその方面的学界の大御所の先生、各業界のリーダー格の専門家によって構成されていました。私としては高級家庭教師付きの留学生のような立場になり人生でこれほど豪華に研究生活を過ごした時期はありません。すべての産業において非常に遅れている日本からの視察団はゆくところで大歓迎を受け、工場内の写真でも撮り放題、設計図も必要なら何でもという調子でした。しかし、GMだけには警戒され、中央研究所の中には入れて貰えませんでした。ほんの2社ほどで、「日本は、今は当社のよいお客様ですが、将来はよい競争相手になるでしょう」というような挨拶を受けましたが、その時は何という優しい心配りをする人かなと思ったほど日米の格差、優劣はおおきなものがありました。アメリカの業界大手の企業では何処も発明・発見に資金と人材を投入し、将来の特許紛争に備えて各研究員ごとに研究ノートが渡されメモからアイデア、計算の記録に至るまで記入したものを銀行の金庫のような雰囲気の研究ノート室で厳重保管していました。特許制度について、アメリカが今でも先発明主義にこだわっている理由がここにあり、日本の先願主義の制度と対峙するものです。

1964年は日本では東京オリンピックが開催され、それに呼応して東海道新幹線が開通しました。アメリカではこの前年のケネディ大統領の暗殺事件やベトナム戦争への介入、公民権活動に象徴される人種間摩擦が政治と行政面で暗い影を落としていました。

しかし当時のアメリカは、世界経済のトップ・リーダーとして輝かしい存在でした。世界中から有能な人材を集めての、基礎研究をベースにした研究開発は、国、大学、民間研究所、企業において極めて合理的に分担され、かつ組織的に行われていました。今日、日本の研究開発も国家戦略の一環として位置づけられ、産学官の連携がすすんでいるようにみえます。しかし、縦割り行政や、研究や開発などの概念・規定のあいまいさが合理的な分担関係の確立を阻んでいます。

今年(2009年)の5月に放送されたWBSの番組で、使用された米国商務省発表の基礎研究と応用研究の日米欧の比較データが、発明は日本が 0、アメリカ 29、EU 11 となっていて、商品化は日本 24、アメリカ 17、EU 3 となっていました。説明にあたられた知的財産権の専門家は、これはアメリカによる恣意的な解釈によるデータであると解説されていました。おそらく米国商務省のデータは、基礎研究における発明を厳密に定義している全米科学財団(National Science Foundation)の資料に基づいていると思います。

同財団の基礎研究活動の定義は、「科学知識の増加を目的とし、研究者の主要目的が研究の応用でないこと」とされています。アメリカでは科学研究(Research)と技術開発研究(Development)の区分をはっきりさせ、R&Dと分けていますが、日本では研究・開発と分けず、いつもよくたにされていて定義が非常にあいまいです。まだこの世にないものの研究や、オリジナルな研究はアメリカの得意とするところです。日本の場合は、学界、産業界ともにアメリカの後追い的研究が多く、革新的な提案が受け入れられにくい社会的な素地があります。

4. まとめに代えて

これまで日米の文化的環境の違いから、異なった制度的な慣習の違いをみてきました。しかし最近は、グローバリゼーションの影響を受けて、両者の違いが薄らぎつつあるのも事実です。

日本の学界では、手段の目的化がすすみ課題の細分化や現実をふまえない分析主義や文献志向的研究が目立っています。木を見て森を見ずの喩えがありますが、これが行きすぎると木も森も見えない学者ばかりが増えてしまいます。最近、戦略論で著名なヘンリー・ミンツバーグ教授の「MANAGERS NOT MBAs」、邦訳「MBAが会社を滅ぼす」が出版され話題になっています。彼は本書中の「問題だらけのMBA教育」の項でアメリカのMBA教育の分析至上主義を批判し、分析にありがちな、時間的ズレ、データの信頼性の欠如、つまり食い的なハードデータの偏りと重要データの欠落などを問題にしています。もともとMBAコースは、まえにも説明しました過度に専門化されたアメリカの経営関連科目履修者に対しての、ビジネスの実態に基づいた、経営の全般的把握を可能にする、教育と訓練を与えるものとしてスタートしたものです。しかし現状はミンツバーグ教授が指摘してのとおりです。

日本のMBA教育は第2次大戦中にいくつかの大学や高等専門学校で始められました。これはアメリカをモデルにしたものではなく、文部省による戦争遂行のための教育改革の一環として実施されたものです。内容的には商学部や経済学部のなかに工学部の科目を加えて工業経営学科や工業経営専門学校をつくりました。その逆のケースもありましたが、その中の白眉は名古屋高等商業学校から転換した名古屋工業経営専門学校でした。わずか3年ほどで再改組された後に名古屋大学経済学部として再転換されました。この教育改革は名古屋高等商業学校長の國松豊教授を中心にしておこなわれましたが、國松先生は学内に実験室でない外部の受注に応じる本格的な製造工場を設置し原価計算の指導をされていました。先生は1914年から1915年にかけて欧米に文部省から研究出張に派遣され、テイラーの亡くなる1915年にテイラーの高弟であるカーネル・ハザウェーの工場で6ヶ月間の研修を受けられました。先生は帰国後、小樽高等商業学校(現小樽商科大学)に原価計算論担当教授に任用されましたが、学内に工場を設置して指導されたことは知られています。先生が1926年(昭和元年)に出版された「科学的管理法綱要～能率増進の原理及び応用～」の中では、「時間研究を行うに当りては製造命令に対する原価計算よりも……多数の作業方法中最も能率高きを選んで標準化し……作業方法の選定には作業原価の比較を不可欠となす。P.376」と述べられて、今日の現場主義に立つトヨタ生産方式や、活動基準原価計算(activity based costing)と同様な趣旨の主張をされています。

現在、産学官によるインターンシップ計画の実施が盛んですが、行政主導による実務体験の域を出ないように思われます。大学自身によるリーダーシップの強化が望されます。現在、個人を中心とした大学間連携による単位互換制度がありますが、他大学との学部連携で資格取得の機会を増やしたり、専門教育機関との連携で学生自身の質の向上を図るなど、大学が自身の可能性を高めるための取り組みは多く残されています。

しかし一番大きな日米の制度上の違いは政治・行政制度の質的な隔たりでしょう。日本では、行政側で立法のお膳立てをして、運営や解釈に大きな自由度のあるフレームワークだけのような法律を作らせ、それを行政指導という名のもとに自由に運転出来る様な仕組みになっています。そ

の際には学界の代表、民間の代表が中心になっている審議会や委員会などが表に立ちます。このような政治的選択の自由を奪われた国民の状態をただすため、連邦型の道州制の実現に期待が寄せられています。しかし政治家の考えている道州制と国民に都合の良い道州制には距離感があるというよりは同床異夢と表現したほうが良いほど質的な違いがみてとれます。

(講演内容を修正、加筆しました)

講師略歴

いまみつ・ひろかず。京都市生まれ、現在 愛知学院大学名誉教授・商学博士。流通・マーケティング論専攻。名古屋経済専門学校(現名古屋大学経済学部)卒業。1953年オハイオ州立大学フルブライト交換留学生。1964 年東京経営管理協会在外研究員(R & D、アメリカ合衆国)。1972 年コロンビア大学経営大学院フルブライト交換教授・上級研究員。1981・1982 年州立ハワイ大学太平洋アジア夏期経営セミナー講師。この間、中学、高校、大学、大学院の教員を経験。これまでに運輸省地方交通審議会委員、愛知県卸売市場審議会会长、日本中小企業学会副会長、日本商業学会、日本物流学会、日本広告学会の中部部会長を歴任。傍ら経営コンサルタントとして主に海外企業(台湾、韓国、パキスタン、ブラジル)の生産管理、物流、マーケティングの指導に当たる。元中小企業診断士2次試験委員、前 ITコーディネータ協会中部会長。

Developing Second-Generation Voices: Women in the Pre-War Nisei Writers Group

By Valerie J. Matsumoto

In the prewar Japanese American community, Nisei women were active and influential participants in all spheres of creative expression, especially in literary circles. In Los Angeles, the *Rafu Shimpo* and the *Kashu Mainichi* reflect Nisei women's multi-faceted contributions to the ethnic press: they wrote passionate poetry and humorous ditties, penned romantic and socialist realist fiction, reviewed new books and music, composed analytical essays on literature, and aired their opinions in a plethora of newspaper columns. They debated the "Nisei problem" and the roles of women, waxed lyrical over the beauty of nature, and lamented the trials of love. Women also channeled their energy into developing a network of second-generation literati. Leaders such as poet Toyo Suyemoto and writer Mary Oyama Mittwer encouraged each other's literary efforts while also challenging the Nisei literati to present more of their own experiences as Japanese Americans. Today, I will discuss women's participation in prewar Nisei literary endeavors, focusing on the 1936 journal *Gyo-Sho*.

In 1934, Toyo Suyemoto assessed the promise of Nisei literary efforts. She was then a 19-year-old student at the Sacramento Junior College in central California. An acclaimed poet from an early age, Suyemoto subsequently received a BA degree in English and Latin at the University of California, Berkeley. She stated: "The second generation Japanese, as a group, realize that in our complex environment, the youthful literati of our race have much to accomplish. As yet, there has been only the foreshadowed evidence of greater things to come, for we are still in the embryonic stage of literary development. Our lot is by no means simple, for differentiation of thoughts

and ideals lie between the first generation and our own, between our occidental acquaintances and ourselves, necessitating an interpretation, written expression.” Suyemoto believed that, in the process of gaining the maturity and experience necessary for literary achievement, “The second generation literati are gradually building a world entirely our own; constructing a structure belonging wholly to ourselves, simply by mastery of prose-writing and poetry.”

Throughout the 1920s and 1930s, a flood of poetry, essays, fiction, and letters by second-generation women and men contributed to this construction of a lively Nisei world. They repeatedly exhorted each other to develop a “new and different” voice that would reflect their experiences and perspective. Denied access to mainstream publishing by racial barriers as well as by inexperience, they turned to outlets within the ethnic community.

The ethnic press, which stretched along the West Coast from Los Angeles to Seattle, offered a crucial forum for the development of Nisei writers, publishing their fledgling efforts in literary sections that became regular features. The *Kashu Mainichi* in Los Angeles became particularly notable as a literary showcase for the second generation, including writers such as Mary Korenaga, Chiye Mori, Mary Oyama, Toyo Suyemoto, and Hisaye Yamamoto. Within a peer community facilitated by the English-language sections, the Nisei struggled to define themselves in relation to both their parents’ generation and the larger US society. In the process, they established an energetic literary conversation that crossed the United States and spanned the Pacific Ocean.

Women took active and sometimes leading roles in literary networks. In 1940, *Current Life, the Magazine for the American Born Japanese* ran an article on “Who’s

Who in the Nisei Literary World,” profiling fifteen men and nine women, including Mary Oyama, Lucile Morimoto, and Hisaye Yamamoto. They and many others published prolifically in the Japanese American newspapers, experimenting with form and content in the process of developing their own voices. Some adopted a flippant, bold jazz style; Hisaye Yamamoto poked fun at lyric convention as well as social convention in humorous poems with Latin titles. Toyo Suyemoto limned her subjects in formal rhymed verse, stating: “...all that I can give to you/ Is simple speech of everyday.../ Words stripped and stark like life and death/ Wherein you stand midway.” Writing in a variety of styles on eclectic themes, women enthusiastically engaged in the effort to create a Nisei voice, expressive of their ethnic, generational, and gendered experiences.

Driven by the conviction that they had a distinctive perspective to contribute to the Japanese American community and to the larger society, the Nisei literati launched a number of creative-writing journals in the 1930s. These included *Reimei*, edited by Yasuo Sasaki in Utah, and *Shukaku*, a quarterly magazine published by the Southern California poets, and Issei and Nisei organization. A Buddhist youth journal, *Bhratri*, also included creative writing. Similarly, the Los Angeles Nisei writers’ group began a publication called *Leaves* as a vehicle for second-generation literature and art. Rather than just showcasing local talent, they aimed to include Nisei from far and wide. As Carl Kondo explained in 1935, “The literary club of Lil Tokio wants it understood that the pages of its magazine, ‘Leaves’ is open to all writers regardless of distance.” The members, he said, “do not wish it to be merely a club organ but to have a real purpose, such as bringing the Japanese psychology forth for the American people to understand.”

In 1936, the Nisei writers' group moved to upgrade *Leaves* by merging it with *Gyo-Sho*, another quarterly publication. *Gyo-Sho*, edited by Eddie Shimano and sponsored by the English Club at Cornell College, made its debut in June 1936. When *Gyo-Sho* was published, a party was held in Los Angeles in honor of Eddie Shimano; the interethnic mix of guests included Chinese Americans, Japanese Americans, and European Americans.

The cover and title of *Gyo-Sho* signaled the transnational vision of the editor, a Nisei from Seattle, Washington. On the cover, designed by Shimano, was a linoleum cut of a Japanese temple bell, with the title at the top, emblazoned in kanji that were echoed near the bottom by the corresponding romaji. Shimano explained that, like a temple bell struck to herald the start of a new day, *Gyo-Sho*—meaning “dawn bell”—was intended to “announce to the world a new day, symbolizing the awakening of the Nisei.” He declared, “And like the reverberations of the temple bell, it will be heard universally, high birth or low, European ancestry or Asiatic.”

Striking the familiar note of the cultural bridge, Shimano expressed hope that the Nisei, whom he called an “interstitial cultural group,” would someday “bridge the chasm between the cultures of the East and the West.” Mindful of the challenges Japanese Americans faced, he wrote: “Struggling against economic, social, and racial problems, seeking self-expression in a language alien to their parents but a generation removed, called foreigners by their Caucasian fellow-men, the Nisei are earnestly striving for a means of expressing their unique Japanese-American individualities.” Shimano did not elaborate on the nature of these unique individualities, but he seems to have believed they were rooted in Japanese cultural traditions inherited from the Issei, including an aesthetic

sense and an “awareness of cosmic forces,” perhaps a reference to Shinto beliefs. In Shimano’s words, the mission of *Gyo-Sho* was to help the Nisei “to attain full articulateness in self-expression and thereby to contribute to American culture the artistic simplicity and the symbolism of the Orient.”

Although Shimano did not draw any connection or comparison, his goals somewhat paralleled those of the guiding lights of the 1920s Harlem Renaissance, later also called the New Negro Movement. As Patricia Liggins Hill states, in 1920 W.E.B. DuBois issued perhaps the first call for “a renaissance of American Negro literature,” writing, “the material about us in the strange heart rendering race tangles us in riches beyond dreams, and only we can tell the tale and sing the song from the heart.” Although Eddie Shimano did not clearly define what might be unique about Nisei experiences, he felt that the second generation had something significant to contribute to American culture. The “new day” and Nisei awakening that he anticipated call to mind the emergence of the “New Negro” and a dynamic spirit of self-expression heralded by Alain Locke, an influential critic in the African American arts movement. In 1925, Locke asserted that the African American was shifting to a new status as “a collaborator and participant in American civilization,” and he believed that these artistic contributions would lead to recognition and acceptance. Likewise, Shimano hoped that the gifts of Nisei creativity would reach a wide, appreciative audience beyond the ethnic community.

The vehicle of Shimano’s ambitions was a 24-page journal presenting the poems, fiction, and short prose of ten Nisei, with the addition of a translated Japanese story. Six of the ten writers were women: Mary Oyama, Toyo Suyemoto, Amy Tomita, Teru Izumida, Mary Korenaga, and Ellen Thun, a Korean American writer. Of the four short

stories included, three were written by women who explored a range of themes: the civic duty of the second generation, the struggle of a misunderstood artist, and dynamics among women in a Japanese family. In these three stories, young women protagonists grappled with differences between how they were perceived by others and how they identified themselves. Of course this was an issue of keen concern to the Nisei. Today I will discuss two of these stories which are also notable for addressing issues of women's duty, as citizens and as family members.

Mary Oyama produced the one piece in *Gyo-Sho* that explicitly addressed racial dynamics from the point of view of a Japanese American character. A young Nisei woman's first trip to the voting booth marked her "Coming of Age" in Oyama's short story of the same title. This work could be read as a how-to guideline, coaxing nervous Nisei to participate in the electoral process; it also suggested how interracial relations framed the political actions of second-generation youth. From the outset, the protagonist Sumiko thinks about how the white people at the polls may perceive her; she expects that they will misidentify her as younger than her age and as Chinese, because "They always did." The author contrasts how Sumiko identifies herself: "How were they to know that Sumiko wasn't even Japanese?" Although Sumiko is an American, she worries about not being recognized as such: "Wonder what they'll think—a 'Jap' girl coming to help elect the governor of the state?" Sumiko has heard that in some localities, "young voters of Japanese extraction were subjected to a lot of unnecessary cross examination."

Nisei readers might draw reassurance from the difference between Sumiko's anxieties and her actual reception at the polls: Two Jewish children campaigning nearby cheerfully urge her to support their candidate; a matronly poll worker smiles and matter-

of-factly hands her a ballot. Even though no one can see her in the voting booth, Sumiko still feels self-conscious about how she will be perceived as a citizen. She deliberates before each name, lest the poll workers think that she had “voted without any judgment or wisdom on the matter...” Swayed by an issue of continuing concern to present-day southern Californians, Sumiko also votes for the Jewish children’s candidate because “he advocates the saving of our beaches for the public and not for private real estate companies.” Finished at last, she marches away, satisfied that she has discharged “the important duty of a good American citizen.” The happy ending of this story hinged not on the outcome of the election, but on Sumiko’s experience of having her American identity validated by participation in the political process.

Mary Korenaga’s story, titled “Chiyono,” was set in rural Japan, and focused on the realm of family relations, particularly the ties among women. For Korenaga, this was an imagined setting, since she did not visit Japan until after World War II. However, hers was an informed imagination--a family member has speculated that this story may have grown out of Korenaga’s relationship with her grandmother, who shared with Mary her experiences in Japan. The protagonist of “Chiyono” is introduced to the reader as a heartsick young woman working angrily and efficiently in a rice paddy. The story delineates the conflicting family obligations that Chiyono must weigh and also the nonverbal communication between her and the sister-in-law with whom she is at odds. Chiyono has just returned from three weeks spent caring for an ill older sister who had requested her help. The presumably older brother with whom Chiyono lives gave permission, but his wife excoriates Chiyono for neglecting her duty to them, exclaiming that the ailing sister is married and therefore the responsibility of the family into which

she has married. The sister-in-law views Chiyono not as a supportive sister but as a “shameless hussy!” Deeply upset, Chiyono responds silently by going out to weed the rice and working like an automaton, not even stopping for lunch. Later, her sister-in-law also sends a message without direct speech: Chiyono’s small nephew arrives with a lunch basket filled with her favorite foods. Chiyono “knew and accepted the mute appeal.” The apology is magnified by the news that the sister-in-law is making sushi for dinner and afterward the whole family will attend a shibai. Overjoyed by the prospect of these special treats, Chiyono forgets her grievance. Both the nephew’s words and his mother’s gestures convey acknowledgment of her labor for their family.

Korenaga’s story reflected the *Gyo-Sho* aim of welcoming a diverse audience—the editor and author clearly anticipated the needs of readers unfamiliar with the Japanese language. When Japanese words such as “Obachan,” “shibai,” and “osushi” appeared, they were followed by parenthetical explanations. Nowhere else in *Gyo-Sho*—except for the title—do Japanese words appear.

Despite the ambitions Eddie Shimano voiced in his foreword, one would be hard-pressed to determine what might be uniquely Japanese American in most of the *Gyo-Sho* writings. The featured poems explored various shades of romantic disillusionment and philosophical musings, none of them addressing experiences specific to the Nisei, except for Teru Izumida’s mention of Japanese dance. It would be difficult to ascertain whether this selection mainly reflected Shimano’s tastes, or whether it was representative of the submissions he received. Without the contributions by Mary Korenaga and Mary Oyama, *Gyo-Sho* might have resembled a mainstream American college literary publication.

In the assessment of reviewer Carl Kondo, the first issue of *Gyo-Sho* was a worthy start, but “the writings of the representative group of Nisei authors and poets express a stirring which has yet to see the light of the promised dawn.” Kondo focused his critique on what he perceived as the general absence of a Nisei voice: With a few exceptions, he felt that “The others speak in occidental voices, no two the same, yet one in viewpoint. They do not see the American scene as other races do; what they see is tinged with the color of what they, themselves, are. The product is unsatisfactory when it is remembered that the efforts of the writers were to voice the surging flow of their generation, the Nisei.” As exceptions to this “occidentalized” tone, Kondo cited Teru Izumida’s poem about dance and Eiji Tanabe’s translation of a Japanese story. He singled out Mary Oyama’s piece “Coming of Age,” in which he saw the beginning of a “new approach to literature typically Nisei.” Such writing, he believed, would portray the struggles and environment of the second generation without bias and “narrate what is ordinary and American, yet Nisei because it will be saturated in the psychology of the Nisei.”

Although some of the themes of the Nisei literary movement resonated with the impetus and issues of the Harlem Renaissance, there were vast differences. The Japanese American endeavor was far younger and smaller, lacking patronage, institutional infrastructure, and established senior leaders such as W.E.B. DuBois. The Nisei’s efforts to create their own literary publications such as *Gyo-Sho* fizzled out in the unpropitious climate of the Great Depression. World War II certainly cut short the early flowering of their creative work, including the promising San Francisco magazine edited by James Omura, *Current Life, the Magazine for the American Born Japanese.*

Gender dynamics constituted another key difference. The Nisei literary movement appears to have been less male-dominated than the Harlem Renaissance—women such as Mary Oyama Mittwer, Toyo Suyemoto, and Chiye Mori played active roles as artists, leaders, and organizers. Perhaps the best-known Nisei fiction writers today are, in fact, two southern California women, Hisaye Yamamoto and Wakako Yamauchi, who have been friends since they met in the Poston camp during World War II.

The Nisei, in their effort to develop a Japanese American approach to literature, drew encouragement from the accomplishments of fellow Japanese Americans. For example, the ethnic press took note when Seattle Nisei Setsuko Kashiwagi sold a novel about Japanese American family life in the future to a Philadelphia press (1934), and Kimi Gengo's poetry collection *To One Who Mourns at the Death of the Emperor* was published in New York City in 1935. Kashiwagi and Gengo were two of the few Japanese Americans who succeeded in publishing books in the prewar period.

The Nisei writers enjoyed a camaraderie forged from a shared passion for creative expression and a strong sense of ethnic and generational identification; their networks spanned geographical distances, meeting within the pages of the English-language sections of the Japanese American newspapers. In 1934, for example, Larry Tajiri noted the scope of the writers featured in the *Kashu Mainichi*'s literary section: Welly Shibata wrote from Osaka, while Aiko Tashiro was in Karuizawa; Tooru Kanazawa had moved to Alaska; Yasuo Sasaki was studying medicine and sending poems from Cincinnati, Ohio; Mary Korenaga wrote from Provo, Utah; James Omura was in San Francisco; and Toyo Suyemoto lived in Sacramento, California.

Women writers eagerly read each other's work and provided warm support. Lily Yanai, in a 1938 *Kashu Mainichi* column "Telephooie," thanked writer Ayako Noguchi for a gift of orchids, sent perhaps in honor of her restarting the column. Yanai also complimented Noguchi on her column "La Hash Exclusive," which she said (taking Noguchi's food metaphor) was her "favorite dish" on the *Rafu Shimpo* menu. Toyo Suyemoto remarked on the encouragement she received from the more senior writers such as Mary Oyama, Ellen Thun, Larry Tajiri, and Yasuo Sasaki. Similarly, Hisaye Yamamoto was influenced and heartened by the Nisei creative writing that appeared in the ethnic press. Reading their references to each other, playful and admiring, conveys their sense of community. Despite occasional squabbles, and no end of brickbats from critics, they were comrades united by the conviction that they had embarked on a worthy and exciting enterprise.

New themes entered their writing as wartime tensions rose in the United States. Somber images shadowed their imaginings. In 1940, in the annual New Year's edition of the *Kashu Mainichi*, in a poem Hisaye Yamamoto asked the "question":

"how can I write of brother love
of laughter of children in the street
of pale shoots in the brown of bare earth

how can I speak of casual things
of the icy cleanliness of fresh fallen snow
of Christmas come wrapped in red ribbon
how can I sing glad song and smile
at the soft dusky warmth of a blue, blue song
or exult in the coolness of smooth rain

when brothers golden like the sun
and brothers with pale white skin
hate blindly across the cruelty of steel
when children hide in darkened cellar
or flee uncomprehending in sobbing sorrow

when cold rain beats down unfound ones
rotting in inglorious muddy death
with frightened eyes..."

The tone of Nisei literature shifted as war abroad and political expediency at home made Japanese Americans increasingly vulnerable.

CONCLUSION

The nascent Japanese American press provided a crucial forum for Nisei efforts; few were ever able to reach a wider audience. Within its pages they experimented with a wide array of forms, reflecting the influence of high art and popular culture. In the weekend literary sections, social-realist fiction rubbed elbows with romance, sonnets, haiku, and free verse. Although most of their dreams of public acclaim went unfulfilled, both their assessments of the realities of life and the possibilities they imagined reveal much about the ways in which second-generation Americans sought to define themselves before World War II. The literary sections of the ethnic press also reveal the dynamic roles women played in the effort to develop both a Nisei voice and Nisei literary networks.

Curriculum Vita
VALERIE J. MATSUMOTO

Department of History University of California, Los Angeles 405 Hilgard Avenue Los Angeles, CA 90095-1473 Work: (310) 825-4601; 825-4508	Department of Asian American Studies University of California, Los Angeles 3336 Rolfe Hall, Box 957225 Los Angeles, CA 90095-7225 (310) 267-5592
--	--

EDUCATION

Ph.D., U.S. History, Stanford University, 1985.
M.A., U.S. History, Stanford University, 1980.
B.A., U.S. History, Arizona State University, summa cum laude, 1978.

HONORS

UCLA Distinguished Teaching Award, 2007.
Award for Excellence in Graduate Mentoring and Teaching, UCLA Asian American Studies Graduate Student Association, 2007.
Toshio and Doris Hoshide Distinguished Teaching Award, UCLA Asian American Studies Center, 2006.
Organization of American Historians-Japanese Association for American Studies Japan Residency, Tokyo University, Komaba Campus, 1999.
John Randolph and Dora Haynes Foundation research award, 1998-99.
Clark Professor, UCLA Center for 17th- and 18th-Century Studies and the William Andrews Clark Memorial Library, 1993-94.

TEACHING

Professor, Asian American history, U.S. women's history, twentieth-century U.S. history, University of California, Los Angeles, 2009 to the present. (Associate Professor at UCLA, 1993-2009; Assistant Professor at UCLA, 1987-1993.)
Visiting Assistant Professor, Department of History, University of Arizona, 1986-87.

PUBLICATIONS

"Nikki Sawada Bridges Flynn and *What Comes Naturally*," *Frontiers: A Journal of Women's Studies*, forthcoming.
"Renegades, Pioneers, and Visionaries: Asian American Women Artists in California, 1890s-1960s," *Asian American Art: A History, 1850-1970*, eds. Mark D. Johnson and Gordon Chang (Stanford: Stanford University Press, 2008).
"Teaching Asian American History and Foodways," *Amerasia Journal* 32:2 (2006):75-8.
"Bernice Zamora," *Latinas in the United States: An Historical Encyclopedia*, eds. Vicki L. Ruiz and Virginia Sanchez Korrol (Indiana University Press, 2006).
"Nisei Daughters' Courtship and Romance in Los Angeles before World War II," *Asian American Youth Culture*, eds. M. Zhou and J. Lee (NY: Routledge, 2004), pp.83-99.
"Japanese American Girls' Clubs in Los Angeles during the 1920s and 1930s," *Asian/Pacific Islander American Women: An Historical Anthology*, eds. Shirley Hune and Gail M. Nomura (NY: New York University Press, 2003), pp.172-87.
Guest editor, *Amerasia Journal* 26:1 special issue, "Histories and Historians in the Making" (2000).

- “Los Angeles: Postwar Snapshots,” *REgenerations Oral History Project: Rebuilding Japanese American Families, Communities, and Civil Rights*, edited by the Japanese American National Museum et al (Los Angeles: JANM, 2000), pp.xxix-xli.
- Over the Edge: Remapping the American West*, co-edited with Blake Allmendinger (Berkeley: University of California Press, 1999).
- “Nisei Women and the Creation of Urban Nisei Culture in the 1930s,” *Over the Edge: Remapping the American West*, pp.291-306.
- “Reflections on Oral History: Research in a Japanese American Community,” *Feminist Dilemmas in Fieldwork*, ed. Diane Wolf (Boulder, CO: Westview Press, 1996), pp.160-9.
- “Redefining Expectations: Nisei Women in the 1930s,” *California History* (Spring 1994):45-53, 88.
- Farming the Home Place: A Japanese American Community in California, 1919-1982* (Ithaca: Cornell University Press, 1993).
- “Desperately Seeking ‘Deirdre’: Gender Roles, Multicultural Relations, and Nisei Women Writers of the 1930s,” *Frontiers* 12, No.1 (1991):19-32.
- “Two Deserts,” *Making Waves: An Anthology of Writings By and About Asian American Women*, ed. Asian Women United of California (Boston: Beacon Press, 1990); also published in *The Forbidden Stitch: An Asian American Women’s Anthology*, eds. Shirley Geok-lin Lim et al (Corvallis, Oregon: Calyx Books, 1989).
- “Japanese American Women during World War II,” *Frontiers* 8, No.1 (1984):6-14.
Reprinted in *Unequal Sisters: A Multicultural Reader in U.S. Women’s History*, eds. Ellen DuBois and Vicki L. Ruiz (NY: Routledge, 1990, 1994, 2000).

PROFESSIONAL PRESENTATIONS (RECENT)

- “Nikki Sawada Bridges Flynn and *What Comes Naturally*,” American Historical Association, January 2010.
- “Rice and Rings: Nisei Women, Courtship and Marriage in the Early Postwar Period,” The Legacy of Japanese Women / Past, Present & Future: U.S.-Japan Women’s Dialogue, a symposium sponsored by the Consul General of Japan and the National Japanese American Historical Society, San Francisco, CA, March 22, 2008,
- “Celebrating the Seamless Art and Life of Ruth Asawa,” M.H. De Young Art Museum, San Francisco, California, January 6, 2007.
- “Seeking ‘Deirdre’ -- and Finding Her in the Diary of Mary Oyama Mittwer, 1934-8,” Visionaries in the Academy: Women of Color at UCLA, faculty lecture series, Young Research Library, November 17, 2005.
- “Fashion and Ritual in the Development of an Urban Nisei World: Japanese American Women in Los Angeles, 1920s-30s,” Berkshire Conference of Women’s History, Claremont, California, June 2005.
- “Japanese American Internment during World War II” and “Women on the Home Front,” History Links: Teaching American History summer institute, Rutherford B Hayes Center, Fremont, Ohio, June 16-17, 2005.
- “Using Oral History to Unearth Japanese American History,” Japanese Americans in Arizona Oral History Project, Phoenix, Arizona, November 8, 2003.
- “Researching Asian American Women’s History,” Resourceful Women: Researching and Interpreting American Women’s History, a Library of Congress Symposium, Washington, D.C., June 20, 2003.

An Exhibition of Japanese American Women Through Social Networks
By Rosalyn Tonai, Executive Director of the National Japanese American
Historical Society.

*Tanaka sensei, Yamamoto sensei, Kwansei Gakuin University, minasama- de
Ohiyo gozaimasu.*

*Tada ima goshokai ni azukarimashita
TONAI, ROSALYN desu.*

*Konoyouna sekide aisatsu dekiru koto wo
Taihen kouei ni o moimasu*

This is a great honor to be presenting today.

*Taihen moushiwake arimasen, nihongo ga
Amari tokui dewanai node,*

Koko kara wa eigo-nite shi-tsuge-re-itashimasu

It is a great honor for me to be here today. You'll have to excuse me, since I have am unable to speak in Japanese having not lived in Japan for over 40 years, I'll be presenting in English.

My talk today is about Strength and Diversity: Japanese American Women's Story through Exhibition

I consider myself a practitioner in the area of exhibition planning, organization and development.

I'd like to share with you my observations and experience in presenting the Japanese American women's story through exhibition.

Strength and Diversity: Japanese American Women, 1885 to 1990, happened over 20 years ago, yet it still has its effect on social networking today.

I was so pleased to see the special Nikkei women's exhibit at the Yokohama Overseas Migration Museum. Many of the women scholars here today, had worked tirelessly on its scholarship, photographs, artifacts, and stories that were so well presented. I understand Empress Michiko will have an opportunity to see the exhibit soon. I'm sure she'll be very impressed with the diversity of ordinary women's stories presented.

An exhibition can be one of the best ways to present relatively unknown stories to the public and to achieve multiple goals. It presents original academic scholarship, facilitates the discovery of rare artifacts and archival materials, and

initiates the collection of oral histories. In the realm of public engagement, an exhibition raises awareness, empowers people, and creates long-term relationships both institutionally and professionally. Ultimately, it fosters a long-term impact and which can sustain social change.

We achieved this, not always by design, but through a process of social networking and organizing. These are the same essential ingredients used, especially when the story of Japanese American women are underrepresented in mainstream institutions.

I began working at the National Japanese American Historical Society in September 1987. I was a graduate student in nonprofit administration at the University of San Francisco. Prior to that I had graduated from UC Berkeley, majoring in Social Welfare and worked in the Asian American community on Asian immigrants and refugees issues, namely job training and mental health needs assessment. But what I learned from the activists-turned-practitioners was an upholding of value of diversity among all Asians. Every story was important, especially those communities whose voices were underrepresented in the mainstream.

Dr. Clifford Uyeda, who was himself a “change agent” and John Tateishi who also led the successful redress campaign within the Japanese American Citizens League (JACL). Together with Tom Kawaguchi, a distinguished veteran of World War II (of the 442nd and Military Intelligence Service,) who helped bring the story of Japanese American soldiers to the Smithsonian’s *A More Perfect Union: Japanese Americans and the US Constitution*, all wanted me to stay, as part of their long-term succession plan. They suggested that I work on a women’s exhibit, with which I had no experience. They assembled a group of well-educated, accomplished Japanese American women in the San Francisco Bay Area, both Nisei and Sansei.

Many of them were from the Women’s Concerns Committee of the JACL, who had organized themselves to bring up gender related issues through the ranks of the JACL. Morale in the community at the time was running high, because of the national media attention of the Smithsonian’s exhibit, and redress was gaining momentum in Congress and in the Courts.

Some critical pieces fell into place to get us on track with the exhibition’s development:

1. We secured a museum venue. The Oakland Museum of California.
2. We secured funding. A matching grant from the California Council of the Humanities, a branch of National Endowment for the Humanities.
3. We secured good leadership, with institutional support.

So how did this all come together? Social Networks.

The Oakland Museum of California had just hired Carey Caldwell as their Senior

Curator of History. She had come from establishing a Suquamish Tribal Museum in the Pacific Northwest working with Native American elders and anthropologists. She had established personal relationships with Japanese Americans on Bainbridge Island. Her dentist and local leader was Frank Kitamoto a former internee and the young boy in the famous iconic photo of the mother and children leaving Bainbridge Island.

I followed up with Carey Caldwell and her boss, Chief Curator Tom Frye, well-known in the museum world. A site visit to our offices was arranged. Later, I learned that the Museum was developing collaborations with other ethnic communities such as the African Americans-African American Historical Association in Oakland, as they were grappling with issues of diversity within the museum world. Our exhibit followed theirs, reflecting the Bay Area's rich and diverse ethnic heritage.

How we got funding? The Humanities Council wanted to fund this project as it illuminated the story of internment experience through a unique perspective, from the little known history of women. We stacked the proposal with experts in the field. Professors Valerie Matsumoto, UCLA, James Hirabayashi, SFState University, Jerold Takahashi, UC Berkeley, Carey Caldwell and Tom Frye from the Oakland Museum. Also professional designers like Jonathan Hirabayashi and Janice Kawamoto joined the team.

Most importantly, the leadership evolved out of an existing network of women with former commissioner Anne Saito Howden convening the first meetings, then later Chizu Iiyama and Alice Nakahata taking the helm as co-chairs of the Womens Exhibit Committee. The two worked together on the Womens Concerns Committee of JACL and had a cadre of feminists working through JACL to push for womens issues: health care, elder care, gender rights. Subcommittees got organized. We had Niseis with organizing and administrative experience like Nikki Noriko Sawada Bridges, writer and wife of the legendary union leader Harry Bridges, writer Mei Nakano who wrote the accompanying book: Japanese American Women Three generations, Daisy Satoda who worked on Oral Histories at NJAHS, redress activist Kiku Funabiki, Naoko Ito-quilter, Dr. Reiko True, former director of SF Mental Health Department, Katherine Reyes and Florence Hongo, Japanese American Curriculum Project (AACP). Sanseis: Gayle Nishikawa, Kathleen Hirooka and Pat Abe, and Lynne Horiuchi-curator of Turning Leaves.

CONTENT.

Whose story was this?
Who was the audience?

We invited the professors to help address the content issues. A lively discussion ensued. It seemed to line up along gender, men vs. women, but that is because many of our women were feminists or activists. Prostitutes and runaway wives-

issue raised concerns among the men-folk including historical evidence of domestic violence. Many of the men did not want to be portrayed that way. There was a long explanation about why we should be discouraged from doing so.

We asked: Who was this audience for? The broader public? For our community? We agreed we needed to validate the experience and lives of ordinary women.

Back in 1987, there was a lack of historical materials on Japanese American women; few books, studies, let alone scholars existed on the subject. It was evident and presented a challenge.

Recognizing this, the committee organized teams through California which quickly expanded nationwide to conduct oral histories. Within nine months, some sixty oral histories were collected from Issei, Nisei, Sansei, urban, rural communities, well-known and ordinary women, some even anonymously. These recordings and transcripts revealed a past rich with stories never told, routines of daily life forgotten and feelings well hidden. Through these oral histories the collective story of Japanese American women was pieced together. Mei Nakano, stepped in to write a book to include many of these interviews she conducted and others collected through oral history. Her publication: *Japanese American Women: Three Generations: 1890 to 1990* would be used in classrooms for Asian American Studies.

Exhibit collections proved to be another challenge with many prized possessions once owned by JA lost or destroyed during WWII. An area-wide call went out and soon, we can a nice collection of pre-WWII, wartime and postwar era artifacts.

This was an unusual exhibit in that it was produced, and curated primarily by committee.

The interpretative program and materials were rich and extensive which included an exhibition video, classroom guide, a book, school program, docent program, public programs, film screenings, literary talks and book signing, presentations on camp, dance performances, art & quilt exhibitions

A record number of 30,000 people attended the exhibition which ran for three months. Facial tissues were requested in the gallery because the visitors were often emotionally overpowered by the poignant stories revealed. Chance encounters, serendipitous some after 50 years occurred.

The show was so successful that the Museum suggested that we tour it. While I was honored by the success. I was somewhat about hesitant about this opportunity. Strength & Diversity was like giving birth. It took quite a lot of strength and endurance. The exhibit's "gestation" was 2 years. One could imagine being under pressure of not two mothers' expectations, but under 40 mothers!

"Little did we know that we would undertake a personal journey into our varied and sometimes unknown pasts and arrive at a better understanding about ourselves as Japanese American women with a deeper appreciation for our mothers."

We decided to proceed... because we needed to capture more local stories. Strength & Diversity toured to Hawaii, Oregon, Washington, Illinois, New York, Nevada, and California through the Smithsonian Institution. It received awards from the American Assoc. for State and Local History 1991 and 1992 from the Smithsonian Institution Award of Excellence for new Scholarship and the discovery of original artifacts.

NJAHS developed many more groundbreaking exhibitions such as LATENT AUGUST, the Legacy of Hiroshima and Nagasaki in 1994, and Diamonds in the Rough: Japanese Americans in Baseball, which toured to the Baseball Halls of Fame in the US and Japan in 1997 & 1999. We are currently working on the development of the MIS Historic Learning Center a preservation and adaptive reuse project, using the same formula for success.

Long-lasting, systemic.

First. The women went on to greater scholarship... to see and meet the growing number of Japanese American scholars from Japan both men and women is just amazing in the last 20 years. Other women from the committee went on to form nonprofit organizations, work on human rights, peace redress issues, advanced their careers. We continue to work on issues related to historic preservation.

What was learned?

Never underestimate the power that you hold and the strength within yourself and friends that you make. The chance encounters, the new relationships and interconnections we have are quite powerful and we can move mountains. This journey has underscored the need to create museums and educational learning centers, such as the one we are working on with the National Park Service at the Presidio of San Francisco so that these historic places of learning, so that the lessons of the Japanese American experiences can be told to the world.

It has certainly heightened my awareness of how a movement can make change and how we can become a part of a greater whole. We dedicate ourselves to preserving history--sharing the stories the very way that we understand them to be from the Issei, Nisei..To deliver a clear message--to ensure a more peaceful and just future...

During this Thanksgiving season, I must acknowledge Dr. Satsuki Ina who introduced me to this group of energetic women scholars who were able to meet the pioneers of this JA women scholars consortium Sensei Professor Ikuyo Tanaka and Professor Masako Iino and many of you who are here to day. You need to commend yourselves, pursuing your careers, for following your passions,

in addition to raising your children, taking care of your family, husbands, partners...

I thank the number of supportive men, like my mentors, Clifford and Tom, and husband who supported us with funding, organizational support, and unquestioning faith in our ideas.

隨想

13年ぶりのワシントン D.C.

越守丈太郎

(中日新聞経済部記者、2007－2008年)

メールアドレス(jotaro.koshimori@fulbrightmail.org)

2007年7月、フルブライト客員研究生として、ワシントン D.C.のポトマック川沿いに佇むジョージタウン大学に来た。同大学のランドマークである Healy Hall から涼しげな鐘の音が、夏の D.C.の乾いた空に響く。D.C.と同大学に来たのは、青山学院大学国際政治経済学部在学中の1994年以来、13年ぶりだった。

研究テーマは、「9／11同時多発テロ後の治安対策と市民生活の変化について」。“the Center for Peace and Security Studies”という研究所に籍を置かせていただいた。センター長の Daniel Byman 教授はテロリズムと中東事情の専門家であり、「9／11調査委員会報告」の作成に携わった一人でもある。挨拶時、「とにかく米国生活を楽しんでくれ」と言ってくれた。講義に執筆と多忙を極める先生だった。

フルブライターといつても、東京と埼玉で計6年間、殺人、汚職、経済、暴力団・組織犯罪など事件取材に追われてきた新聞記者に過ぎない。私生活を捨てて取材、執筆してきた記者経験とわずかな知識を、一度、整理して発展させようとしたのがフルブライト経験だったと言える。渡米前、フルブライター記者の先輩である共同通信の太田昌克氏から頂いた助言にならい、秋学期に知識を詰め込んだ後、取材へ移った。

秋学期には、安全保障、情報機関、司法制度などに関する講義を、春学期にはテロリズムとテロ対策、国土安全保障政策の講義などを受けた。どの講義でも毎週300ページ前後の予習が課せられ、読みこなすのは大変だった。それまでわずかだった白髪が、10カ月余りで一気に増えたが、今では非常に良い訓練だったと思っている。“Security”的な名前が示すとおり、教授陣にも学生にも軍や情報機関の出身者が多かった。CIA、DIA(国防情報局)、NGA(国家地球空間情報局)、国務省、FBI のほか、ワシントンポストや CNN 記者の学生もいて、講義は刺激的で贅沢な時間だった。

財務省の Daniel Glaser 氏が講師だった資金洗浄とテロ資金供与対策の講義は特に人気が高かった。Glaser 氏は、マカオを舞台にした北朝鮮の国際的マネーロンダリング事件で、米国側の交渉担当の一人だった。聴講を希望すると、授業で質問をしないことを条件に出席を認められた。Glaser 氏が現役の連邦職員だったからだろう。他の講義で「客員研究生だからといって遠慮せず、どんどん発言せよ」と求められたのとは大きな違いで、講義中に何度か「米国財務省の見解ではなく、私的な会話だ」と注意されたことからも察せられる。フルブライターとはいえ素性は外国人記者。米国役人の保秘意識を感じた。春学期に受講した「諜報政策の問題点」の Burton

Gerber 教授も思い出深い。Gerber 氏は冷戦期に旧ソ連や共産圏で活躍した CIA のケース・オフィサーで、冷戦末期の米ソ攻防を描いたノンフィクション”The Main Enemy”に登場する。また、今や D.C. の観光名所となったスパイ博物館の設立に関わった一人でもある。「歴史の醍醐味は human dynamism にある」と説いた Gerber 氏。静かな語り口とは裏腹に冷戦の裏舞台を生き抜いた重みがあった。同時期に在日本米国大使館での任務を終え、ジョージタウン大学で教鞭を執っていた国務省の William Morgan 教授とは、しばしば助言を求めてコーヒーを飲んだ。

ジョージ・メイソン大学の Louise Shelley 教授は、膨大なリーディングリストをこなそうと図書館や自宅にこもっていた私に活を入れてくれた。Shelley 氏はフルブライターでロシアの専門家。”Terrorism, Transnational Crime and Corruption Center”を創設した。取材で訪れた際、「記者なのだから、文献を読んでばかりいないで人に会い、雪だるまを作るよう、良い取材先を転がして人脈と蓄積を大きくしなさい」と諭してくれた。彼女と会ってから取材先を広げ、世界銀行や IMF、大統領予備選に出た共和党議員の秘書や連邦議会職員らからも話を聞くことができた。

研究活動も私生活も、フルブライター・コミュニティが私を支えてくれた。D.C. エリアは全米で最も活発らしく、研究者向けの”Fulbright Enrichment Program”は、観光やパーティーなどほぼ月に一回のイベントを企画し、各国から来たフルブライター達を楽しませてくれた。ディレクターの Jeanine Greene 氏は「アメリカンフードはまずいと思っているでしょうが、今日は美味しいごちそうを食べさせてあげる」とグランティー達を自宅に招待し、ご主人と腕を振るってくれたりもした。他方、同窓会の活動も盛んで、イタリア、ペルー両大使館でのパーティーや、ネットワーキングを目的にバーを借り切って”Happy Hour”も頻繁に開いてくれた。日系2世の Keisuke Nakagawa 氏は同窓会の中心メンバーで、今は日米間の交流活性化に尽力している。

D.C. ならではのイベントもあった。連邦議会図書館であった故フルブライター上院議員の記録映画上映会にはフルブライター夫人も出席され、激励の言葉を頂戴した上、一緒に記念写真に収まってくださった。国防総省(ペンタゴン)では、9/11テロで攻撃を受けた時の外壁が埋め込まれている「メモリアル・ブロック」を見学した。通常は禁じられている写真撮影を許されたのはフルブライター研究との名目があつたからだろう。

研究は米国人約100人に9/11テロ後の社会変化について尋ねるアンケートで締めくくった。ポトマック・エリア(DC、メリーランド、バージニア)在住者の意見に偏るのを避けるため、全米から観光客が訪れるスミソニアン博物館群のあるモール・エリアで実施した。計107人に聞き取りした結果、9/11テロ後の米国がテロ前と比べて「安全になった」と答えた人が 45.8%、「安全でない」が 33.6%、「ほとんど同じ」が 19.6%、「分からぬ」1%だった(小数点以下は四捨五入)。科学的でないジャーナリスティックなアプローチとの批判もあるが、テロ後の安全性に対する米国民の見方

は分かれており、テロから7年以上が経っても尚、半数以上が見えない恐怖と自国の脆弱性を感じていると推測される。また、日常生活で不都合を感じるシーンを複数回答で聞いたところ、81.3%の人が「空港での保安検査」を挙げた。

本稿を綴っていた2009年のクリスマス、デトロイトで航空機爆破未遂事件が起きた。ナイジェリア国籍の容疑者やアル・カイダとの繋がりについて、米国の複数の情報機関が断片情報をつかんでいたものの、容疑者の搭乗と爆発物点火を防げなかつた。年が明け、オバマ大統領は”systemic failure”と、情報機関の機能不全に原因があるとの見解を示した。9／11テロ後に成立した米国愛国者法(the PATRIOT Act)は情報機関と捜査機関の情報共有の重要性を謳い、捜査権限や保安検査、入国審査の強化などを定めているが、今回の事件は、そういった情報が統合され、分析されていなかつたことを物語った。9／11後に米国は何が変わり、何が変わっていないのか。恐怖の記憶は未だに鮮明な一方、8年もの間、米国本土への攻撃を防いできた自信と驕りが、組織の機能不全を引き起こしたのではないか。結果的にその被害を受けるのは、何の機密情報も知らない一般国民なのである。

研究終盤に取材した弁護士から質問を受けた。「今回の滞米生活で自分自身はどう変わったか」と。「米国は日本にとって絶対的な友好国としか思っていなかつたが、研究生活で良い面、悪い面を観察したことで客観的に米国を見られるようになったと思う。やはり米国は日本にとって不可欠な友好国であり、興味は尽きない。いつかまた暮らしたい」。1994年当時では得られなかつた答えに、弁護士は満足そつだった。

Atsushi Katagi

2010年2月に新著『オリンピック・シティ東京 1940・1964』(河出書房新社)を出版致しました。東京で開催が計画された第12回オリンピック(1940)と実施された第18回オリンピック(1964)を都市・建築の視点から読み解いたものです。

木村 克美 (自然科学研究機構 分子科学研究所 名誉教授)

私は、1960年から2年間、フルブライト研究員としてコーネル(Cornell)大学の化学教室で国際共同研究の経験を与えていただきました。そのお蔭で、今まで約50回の海外国際研究集会での招待講演などの機会があり、フルブライト委員会にはいつも感謝している次第です。現在は、以前勤務していた国立分子科学研究所(分子研)の名誉教授として、「分子研創設の歴史の研究」のためのアーカイブズ(archives)の仕事をしています。

ところで、私が最初に渡米した1960年は氷川丸(日本郵船)の最後の就航のときでした(横浜→シアトル)。その船上でフルブライト研究員の集合写真が撮ましたが、最近になって私は昔のアルバムの中にその懐かしい写真を見つけました。例の下村脩博士(2008年ノーベル化学賞受賞)もそのときに乗船しておられました(最後の列のほぼ中央の長身の人)。それでは、次の講演会・懇親会を愉しみにしております。

今光廣一 愛知学院大学

最近の経済・経営については百家争鳴、混沌とした状況です。
専門別にコメントしあうセミ研究会(読書会)を立ち上げたいと思っています。フルブライターのご協力・ご参加をお願いします。

白岩 謙一

81歳になりましたが、今のところ元気です。専門の数学と趣味の音楽、囲碁を楽しんでいます。今の大学の状況は大変なようで心配しています。
皆様方がお元気で活躍されるよう願っています。

加瀬豊司

一昨年定年退職で名古屋に戻って来ました加瀬豊司です。四国同窓会からは「転校生」でよろしくお願ひいたします。名古屋は22年ぶりで「浦島太郎」の感覚です。変化に驚くと同時に今だに道に迷っています(昔ここで運転していたという自信で、とんでもない迷い方をすることがあります)。ついに昨年、カーナビをつけたのですが、今は町を覚えるため「街の達人・でか字」の道路マップが愛読書になっています。(美味しいランチの店を教えてください)。

総会で講演をさせていただくことになり、「恐縮」と「緊張」をしております。いろいろご迷惑をおかけすることがあるかと思いますが、本当によろしくお願ひ申し上げます。

フルプライト中部同総会 2010 年度総会

2010 年 5 月 23 日(日) 愛知大学車道校舎 第 3 会議室 午後 3 時・4 時 15 分

2009 年度決算

収入	金額	適要	支出	金額	適要
前期繰越	259,877		総会費用	1,050	名札
懇親会収入	26,000	2000X13 人		1,000	コピーカード
年会費	201,000	3000X67 人		525	文具
	7,500	1500 X 5 人	講師謝礼	10,000	
	10,000	1 人	メール便	440	
			懇親会飲食	34,420	
利子	58		デンソー	2,700	
			表敬訪問		
			例会案内	30,993	
			送付代行		
			講師懇親	3,000	
			会費		
			講師謝礼	20,000	
			録音用 C D	600	
			テープ起し	29,200	
			寄付	50,000	南山大学セミナー
			次期繰越金	320,507	
計	504,435			504,435	

注 1) 2009 年 5 月 27 日に会計帳簿を受けついたので、この日より 2010 年 3 月 31 日までの決算書である。

注 2) 4 月 1 日の前期繰越と 2009 年 3 月 1 日より 5 月 26 日までの支出は下記に記載した。

前期繰越	442,828	印刷費	150,691	Fulbrighter
				No. 18&No. 19
		会合費	9,450	
		通信費	22,810	
計	687,386		687,386	

2009 年度の収支決算につき、領収書、預金通帳等関係書類によって監査を行った結果、適正であることを認め、ここに報告します。

監事 小坂敦子

2010 年 5 月 23 日

議事録

1 総会、例会の開催

承認された。

2 会報の出版

20 号は校正中である。承認された。

3 夏季セミナーへの寄付

藤本先生と相談の上、会長が決定する。

4 財団法人日米教育交流振興財団評議員である上田慶一氏より交代の提言があった。

木下宗七理事と連絡し、会長が調整することとなった。

2010 年度予算

収入	金額	適要	支出	金額	適要
前期繰越	320,507		総会案内	31,000	
懇親会収入	30,000	2000X15 人	懇親会飲食	40,000	
年会費	201,000	3000X67 人	講師謝礼	20,000	
	7,500	1500X5 人	出版費用	150,000	
	10,000	1 人			
利子	58		例会案内	31,000	
			テープ起し	30,000	
			事務費	10,000	
			会議費	10,000	
			予備費	50,000	
			次期繰越金	197,065	
計	569,065			569,065	

フルブライト中部同窓会会則

制定 1983年10月1日

改正 1993年 6月5日

改正 2009年 5月30日

第1章 総則

- 第1条 本会は、フルブライト中部同窓会と称し、
英文を Chubu Fulbright Alumni Association と称する。
- 第2条 本会は事務所を名古屋に置く。
- 第3条 本会は、会員相互の親睦を図り、会員の経験、情報をもとに、より一層の啓発を図り、
日米親善および相互理解を増進することを目的とする。
- 第4条 本会の会員は、正会員、準会員、賛助会員、名誉会員、シニア会員とする。
- 第5条
1. 正会員：ガリオア・フルブライト奨学金のグランティー
 2. 準会員：フルブライト奨学金のグランティーで日本に滞在しているアメリカ人
 3. 賛助会員：本会の目的に賛同し、役員会の承認を得た者
 4. 名誉会員：正会員のうち、本会に特別の貢献をし、役員会の承認を得た者
 5. シニア会員：正会員のうち、本人の申し出があり役員会の承認を得た者

第2章 事業

- 第6条 本会は次の事業を行う。
1. 会員相互の交流、親睦を深めるための活動
 2. フルブライトその他の奨学金を受けて渡米するグランティーへの指導、援助
 3. 日本に滞在するフルブライトグランティーの研究活動 および滞在中の生活への
指導援助
 4. その他日米相互理解を深めるための活動および役員会で必要と認めた事業

第3章 総会

- 第7条 総会は毎年1回開催する。その他役員会で必要と認めた時には、臨時総会を開催する
ことができる。
- 第8条 総会では、次の事項を行う。
1. 事業報告、収支予算、決算の承認
 2. 役員の選出
 3. その他の本会運営のための重要事項の議決
- 第9条 議決は出席正会員の過半数をもって成立する。

第4章 役員

- 第10条 本会には、会長1名、副会長若干名、幹事若干名、監事を置く。
第11条 任期は2年とし、役員の再選を妨げない。

第5章 会計

- 第12条 本会の運営資金は、会費および寄付その他の諸収入をもって、これにあてる。
- 第13条 正会員の年会費は3,000円とする。
- 名誉会員およびシニア会員のうち申し出があった者は 年会費を免除される。
- 賛助会員は1口 年10,000円とする。
- 第14条 本会の会計年度は4月1日に始まり、翌年3月31日に終わる。

発行年月日	平成 22 年 7 月 16 日
発行	フルブライト中部同窓会
事務局	461-8641 名古屋市東区筒井 2-10-31 愛知大学会計大学院星野靖雄研究室 フルブライト中部同窓会 電話 & Fax 052-937-8264 Email: fulbnagoya@gmail.com URL: http://leo.aichi-u.ac.jp/~hoshino/Fulbright.html